



# 身近な校歌

撰 正弘

先日、近所の小学校の校歌を耳にする機会がありました。ロバの音楽座のコンサートで演奏されたのを聴いたので。平仮名ばかりの歌詞の中に、自分の道を歩いていくことを大切にしてほしいというメッセージが込められている気がします。すつかり気に入ってしまったので、歌詞を紹介させていただきます。

立川市立幸小学校校歌

作詞 谷川俊太郎  
作曲 林光

わたしがたねをまかなければ  
はなは ひらかなない  
ぼくがあしを ふみだすとき  
みちは かぎりない  
じぶんで かんがえ  
じぶんで はじめぬ  
幸小のわたしたち

わたしがあすを あきらめたら  
あさは もうこない  
ぼくがほしを みつめるとき  
そらは かぎりない  
あせらず こつこつ  
ねばって やりぬく  
幸小のわたしたち

ひとりか うたを うたいたすと  
こえは こたまする  
ひとりひとり てをつないで  
ゆめは かぎりない  
みんな なかよく  
ちからを あわせる  
幸小のわたしたち

メロディーは、同校のホームページで聴くことができます。この歌との出会いがきっかけで、校歌という存在が気になるようになったので、今回は少しだけ校歌について書いてみたいと思います。

さて、一般的に、校歌に盛り込まれる要素とは何でしょうか。一つは、学校の教育方針です。学ぶ者の心構えや未来への希望、励ましの言葉などが詠まれます。もう一つは、地域の自然環境や文化的環境です。これには郷土愛を育む役割があるのでしよう。校歌を歌うことにより、児童のなかに学校の教育方針や学校愛、郷土愛が定着するように作られています。

このような、校歌の役割のルーツを知るために、少し時代を遡ってみましょう。1893（明治26）年8月12日に、文部省が「祝日大祭日歌詞並楽譜」を告示したことが、校歌の起源のようです。小学校などで祝祭日に歌われる8曲が制定され、校歌発生のものになりました。

実は、明治期から、第二次世界大戦が終わるまで、日本では校歌を自由に作ることでできませんでした。戦前・戦中の学校は、校歌を作成した場合、楽譜、歌詞、歌詞の説明などを添え、文部省に認可申請を行いました。楽譜、歌詞などに修正がある場合、文部省は該当箇所を学校側へ通知しました。この手順を経なければ校歌と認められなかったのです。修正は、楽曲に関するものよりも、歌詞に関するものの方が多かったようです。また、歌詞に関する修正には、表記上のみならず、

歌詞内容に深く係わるものも多く見られました。具体的には、忠君愛国の思想を強く盛り込むなどの傾向がありました。

戦後、教育改革によって校歌の認可制度がなくなり、学校が校歌を自由に制定できるようになりました。教育方針や郷土愛が詠み込まれた、いかにも「校歌」というものから、ポップな曲まで、様々です。

幸小のHPを見ると、PTA広報紙『うつぎ』の、校歌に関する記事を読むことができます。当時、谷川さんに作詞を依頼した先生によると、「富士山や桜といったいわゆる今までの『校歌』のイメージではなく、新しい学校にふさわしい歌をお願いしたとのこと。十年程前までは、学外者が校歌を知る機会

は殆どありませんでした。しかし、現在では、インターネット上で多くの学校の校歌に触れることができるようになりました。身近な学校のホームページを開いてみたら、隠れた名曲が見つかるかもしれませんね。

## 参考資料

- ◆ 浅見雅子・北村真「校歌―心の原風景」学文社・1996（請求記号●GG796）
- ◆ 校歌をたどり調査隊「発掘！校歌なるほど雑学事典 ヤマハミュージックメディア、2004（請求記号●J103483）
- ◆ 嶋田由美「小学校校歌制定に関する研究―明治後期における東京府内小学校校歌制定過程の分析を通して―」『音楽教育』第19号、p16-27、1986（請求記号●P787/16）
- ◆ 谷川俊太郎「ひとりひとりすつこつ立って―谷川俊太郎・校歌詞集―澤標、2008（請求記号●J114495）
- ◆ 「しるか しらぬか しろうか 校歌『うつき』第23号、1993（幸小HPから閲覧できます）